



^ 13
3036
3



門へ 13
3036
巻 3

布指

刀筆青砥石文鸞水箴語卷之三



江隱 曲亭主人筆削

洛客 櫟亭琴魚原稿

第五套 愆参の衣手 夏虫の封翰

のち筑紫の留守の宿小阿禪ハ匙と只二人慰めう寝て日を送るも此間の
事ながら。俟とやねば久々の天河原は船とせむ。水漏さりと契らる星の
枕も羨まぬ。秋の初風を平立て露けた窓の女郎花ひさし寝るは
目睡ぬ曉うさし冷やう。身もまろくと過去をさひつけけけとらう。
翌と明せば七月も既十日ふらりけり。けり観世音菩薩の愆参と唱へ

青砥石文鸞水箴語卷之三

〇一

たる。この日参詣するものへ一千日は當るといひ或は四万六千日。或は六萬六千四百
 参詣の功德亦あつた。この日参詣するものへ一千日は當るといひ或は四万六千日。或は六萬六千四百
 謂悲華經この文を。いと覺はるるなり。時俗この日宗とて参程よ。
 清水寺の觀世音及近きところ流行り。京極三條の辺る。蓮華院の觀音堂へ
 参詣して群集せり。あつた。阿彌の劇齋は仕へよう。あつた。病架は迎へて
 出のうらむ日あつた。物詣るといふ。下へびも許されど。今又旅の留守の家へ
 朝よと葉奴も来ど。夕言訪ふ友もあつた。身とてあつた。小遊山も得る。あつた。
 彼蓮華院へ劇齋が京よ上りて住つた。比よりして香華院とていへばせり
 けへり。彼蘭若へ詣り。と猛り起せり。あつた。是を和木挽坊の異社

許遣と云ふといふ。小異社へその名をゆくと。共侶も来り。あつた。渠よ
 留守と交りて。その日未下刺遠く立出つ。是日傘とて被さる。
 蓮華院よ詣り。觀世音を拜り奉りて。本堂の廻廊を彼此と見せり。あつた。
 煌々たる落日鐘樓を照ると。金龍華鯨を吐るべく。颯々たる夕風空鐸よ
 渡りて。簫鼓空中より降放と疑ふ。秋暑疾く退きて。極楽國土よ入る。あつた。奇峰
 雲聳る。補陀落山よ登ると似たり。實は名も。讚佛場。貴賤老弱群参
 して。唱名の声耳よ充て。不題この蓮華院の方式は。寓居せる。草樂傳二郎と
 以て。浮浪人ありたり。渠色好む。癖あれば。今靈場あり。あつた。詣来る。室妻
 少女は懸想。或は。品定。或は。苟且。物ひか。第一の樂とて。



偽三郎

大頭成統
願主
其女



是謬て
き下多き
偽三郎が衣を
やぶゆ

佐野源左衛門
藤原常世殿

おれき

さぢ

その人の面魂つらみ悪棍あくこんあつむるべし。色白くいろあは髯青くひげあせ眼細くまなこを鼻隆くはなを。
 齒ハ壺蘆うすろの枝えだの如くごと。唇ハ紅花べにばなの含くはむる似にたり。年歳としハ三十さんじゅうを越こえむべし。
 瘦骨うすほねなりて美男子うつくしきおとこの心こころも貌かたちの如くごと。あつむるべし。宗むねるともわたり。再びまた勸解くわんげを
 せよ。つづ。そが後あとは跟ついててゆく。又また方丈ほうじやうの西にしのかたに建仁寺けんにんじ垣かきを取とりけり。引入ひきいちる。
 禊けい廬いあり。こまの人の部屋へやあり。片折かたをり戸かどを推おひひらいて阿彌あみ主ぬし徒たと誘ひき引きども。
 身み怖おそまて平ひら進すすむ。主ぬし徒た竹たけ縁えんをて手てをかけり。復また只ただ管くだを勸解くわんげする。傳つた二郎にらう。
 氣色きしよを柔なげり。否いな。否いな。腹はらをうらう。あつむるべし。勸解くわんげをせんとて。さらむ。婦人ふじんを
 引ひよを待まちたり。聊さう頼たのむ。と。あつむるべし。侍さむらども。衆人しゆじん聚ある。本堂ほんだうで。その
 便べんる。死しむる。あつむるべし。誘ひき引き立て来きつ。要ま時じあり。婦人ふじんを苦くるしめり。いと

恥ちし。た。部屋へやを。え。せ。ま。わ。ら。ま。ふ。こ。そ。ま。れ。ば。か。り。馴な々々。名告なをう。々。面おもあり。
 う。あ。れ。ども。告つぐ。誰たれも。こ。ろ。を。ひ。ん。ま。の。こ。ら。草樂くさらく傳つた二郎にらうと。い。ひ。め。の。こ。撰せん津つ圓えん。
 ある。天王寺てんわうじの樂人がくじんの子こも。あ。つ。二親ふたおやを喪なひつ。所帯ところばいを叔おやぢ又または横領よこりやう。
 せ。ん。て。愁訴しゆすの為ため上京じやうきやうを。れ。ど。宿望しゆくぼうの。ま。時とき至いたり。當院たういんの方丈ほうじやうハ俗縁じやくえんの
 へ。ハ。且かつ寄宿よしゆくを。し。所帯ところばいを横領よこりやうせ。ら。れ。て。も。怨うらみ。忍しのぶ。某たれが。單衣ひとこゝねの。袖そで一ひと隻しやく。
 破やぶら。ま。し。う。と。何なにと。あ。り。ん。況いは月雪花つきゆきばなも。優やさし。君きみの。賤せん話わさ。せ。の。ふ。と。あ。つ。む。る。べ。し。
 身みと。八は膾か裂れ。ま。て。も。堪た忍しのぶ。ま。べ。し。ま。れ。れ。ども。い。つ。ま。せん。この。衣ころもハ。亡母ななの。織オリて
 ろ。い。せ。像見ざうけんと。い。へ。惜あはれ。り。ん。や。破やぶと。綴つづり。も。断離だんり果はる。ま。と。い。へ。と。あ。つ。む。る。べ。し。
 寺内じないに。ま。れ。ば。縫刺ぬいさす。その。人ひとも。く。て。不ふ便べん。と。い。へ。ま。この。單衣ひとこゝねを。ち。ん。宿所しゆくじよへ。い。り。

うへに綴補ひのつづ。こまよまを幸ひる。抑ん身の宿所ハ何処ぞ何氏の
 殿の奥にまよふ。かみかんと問ふ辨舌ゆいと爽やふ委まぬ水と色か
 引とらひぞ悟るべき。阿磔ハ骨を搥拵て。たゞめく吻と息とつら。いつた
 辛らめやあつと。安さ心もみく。然らけり侍りある。妾こそ幸ひ
 るれ。匙も生くる心地ぞせん。今新し衣をめて。その衣の代もと進
 勸解るとも。亡母君の像見ると。許さむべくもあはれ。衣ぬ夏ハ掛はれ
 宣ふまよひてかへて。今宵の中は縫綴り。翌ハ早速この婢見と。還
 ちのうとへさふらん。妾ハ富小路あり。名草劇齋とむらう。右繫は恥
 口隠と偽二郎聞てうち點頭。原来名草ぬとやうんの令政よとて。款

さぶらん身の玉手を惜ん。いと憚るのよこそ。お供ある女中みても。といはれて
 匙ハ塵拵拵り。否。妾ハ舊足袋放雑巾も。刺ゆせん。衣の被縫ハ心と
 ろ侍り。頃日ハ主の殿の旅宿の留守は侍り。かゝ人もこれ由徒然たり。
 侍は妙手よとせれば。といふを阿磔ハ尻目よかけ。うち咳ま。紛せど。
 偽二郎竊は歡び。障子の蔭へ退き。別の單衣は脱ぎ。破とせ。
 七のめの衣を。登とて端近く。出て然る。頼奉る。いと憚ふ。といひ。つ
 袂は推包とて。そが。俵匙は通とせ。阿磔ハ要時沈吟。細小れ
 鏡を附る。金襴の鼻紙夾と。懐より。出と。偽二郎か。や。に。よ。せ。
 宿所を知り。侍り。て。も。と。下。めて。の。見。参。よ。二。る。夜。を。預。り。て。の。代。り。の。影。護。し。

蔽衣又莫綴 深著欲相縁 臨水不可濯 遭砥礪
 究研 かく靈籤と得んもいふそのころをいふと云ふも後々
 中を佛陀と信するのみならず敢又懸念せむそのころをいふと云ふも忘れず問話
 休題する程は偽二郎の只顧阿磔は懸想してこそまかりさすまふやう
 御は彼美婦人が宿所へ富小路ある名草劇齋とのを告て妻の字をい
 か種へ必その側室あるべしといはぬ比この寺の諸檀の姓名簿を閲ん
 件の名草の醫師ありては月新しく檀越へ又そのあつた旅に在り
 徒然ありと口過りし下女は是氷入欵既より謀る所意外に出で造化
 絶妙とや懐入るは似るは本意を遂ぐるのやある彼下女翌に必来

下。先渠とてうへて。媒鳥よせざる緯成らじとやせり。かくやせり。と
 竊は肺肝と推さる。遠く街坊に出で準備の東西を買うつ。その宵
 燈下は毫と漆て。艶翰を写め堅く封下て。曩は阿磔が遣一箇。鼻紙
 夾の間は刺入と支度既は整ひけし。幡釣垂て臥されどもいと樂して
 にも寝られども忽心地は又あやう。いぬる比これの寺に来つ時観音籤を
 拈ひし。第三籤をひくあり。何と云ひし。と目を開て稍ぞひ出たり。
 蔽衣又綴ると莫と深著して相縁人と欲ととへ。よは舊する衣と綴る。
 成難く蔽易し。いふいと難き情癡は喩て綴ると云ふれといふ欵もいふも。
 深著して相縁人と欲ととといふとあれは彼の色は漆り。彼は情は漆らん

その天縁ある奴いふ飲水も臨て濯ぐべからず。砥は遇く初て究研と云。
 深きバ遂は濃き中の水漏すと契りつ。磨く送の眞實情ハ砥より堅
 一といふの飲かれバ是假深の恋ありや。因あり縁あり。亦何ぞ疑ん。吁
 憑しや。と身勝手よ。菩薩を誣る。凡夫の判断生才学ぞ鴻許りけ。案下
 某生再説阿磔ハその日途とら。匙とまぐ。箴めく。遠く宿所へ還ま。バ
 異社ハ中々待つ。松木挽坊へ退る。かそ阿磔ハその夜さ。偽二郎
 糸と綴。針目の拙。奴笑と。と忍へ。更闌るまで。苦心してその破を補ひ。つ
 彼人の。け人の。匙共侶は。噂と人の。噂を想像る。夕涼。秋風不浮動る
 萌葱の蚊屋の裾揚。寝就。けり。かそ又その次の日の午過。阿磔ハ

小杉原廿帖と沈香一両許累をえ。匙は口状云々と叮嚀は分付て彼草衣と
 共。齋。偽二郎許遣。けり。か。程。偽二郎ハ阿磔ハ音耗は。海く。て
 り。み。くと。候程。未由。既。下。る。刺。折。戸。口。より。呼。門。か。そ。の。人。の。下。女。来。よ
 け。は。遠。く。出。迎。へ。あ。の。よ。く。を。来。よ。れ。且。こ。の。へ。と。母。屋。へ。請。と。
 管待。大。く。あ。ん。ざ。ん。バ。匙。ハ。額。は。汗。と。流。し。て。か。や。く。は。膝。と。進。め。阿。磔。の
 海。より。廣。さ。に。速。く。許。さ。せ。の。ひ。へ。お。よ。る。幸。ひ。と。そ。飲。び
 侍。れ。就。て。その。お。ん。草。衣。を。徴。補。ひ。侍。り。け。も。拙。き。手。あ。い。つ。ま。え。裂。衣
 目。と。隠。さ。べ。く。も。侍。ら。べ。ら。る。稱。ぶ。と。も。収。め。さ。せ。ら。う。又。その。二。種。ハ

珍めづらしげらるる侍さむらひどもも有ありつるる隨まりしんん笑わらひし備そま侍へづる受うせせるるが
 いいろろりり飲のみみししここそそ侍さむらひどももととちちらられれ侍さむらひららとと述のべべつつ件あ々々とと進まれれ偽いつはり二に郎らうハ
 日ひかか衣えとと件あのの二に種しゆをを額ひらにに當あてて念ねんをを如ごとくくううちち捧うげげ奉ほう拜はいすすととひひろろひひああるる家いへかか自みづかのの
 玉たま手てをを分わけけののととちちららふふ此この件あ々々とと賜たまひひけけるる一ひと千せん金せんととしし福ふくひひここ彼かれもも皆みなみみか
 んん身みがが執しやく成じやうののひひももああららぬぬ今いまんん答こたをを入いるるべべ安やす坐まりり汗あせをを納いれ
 るるいいんんととちちらら寺てら内うちのの寓ぐう居きよ何なに事こともも隨まりしんん意いをを入いるる東あづま道みち熊くまのの疎そまま
 らら要えるる東あづま西にしのの物ものももんん使つかをを分わけけるるとと進まりしんんとといいひひかかけけと
 銀ぎんのの釵かぎ見み富とみ士し雪ゆきとと銘めい打うちるる白しろ粉こなはは小こ町まち燕えん脂し緋ひ絞しぼのの鬘まげ結むすむむと
 三さん四し種しゆととりり呉くれひひ括くわくく俵たわのの緋ひ纈せのの縷いと半はんのの袖そでははああるるべべ程ほど二に包ふくふふとと取と
 るる

それそれはは匙しハハ披ひききととんんももせせ糸いととと日ひ来きよよううののとと欲ほししととんん件あ々々ととちちららけけはは
 頬ほはは胸むねののととちちらら騒さわぎぎ受うててととちちららちちりりととああららままらら辞ことははああららままらら戴をかきき目めとと且かつく
 納おさめめるるととちちらら偽いつはり二に郎らうハハんんととちちらら微あ笑わらむむととちちららのの東あづま西にし何なにととちちらら受うけ
 納おさめめらられれよよんん身みはは問とひひたたらられれたたらら彼かれ君きみハハ名な草くさぬぬのの令らう政せいははああららままららととちちらら飲のみ
 るるいいんんととちちらら又また何なに水みづのの故ゆゑ頃ころ日ひ旅りょ行ぎやうととちちららああららままららとと問とひひたたらられれたたらら由よしななららい
 主人しゆじん劇げき齋さいハハ筑ちく紫しのの探たん題だいのの徴しるしととちちらら西さい國こくへへ赴おもむききととちちらら阿あ摩ま羅らががううへへ云いふふと
 婦め女によののととちちららととちちらら苗な守しゆととちちららのの遺いちちととちちらら告つげげととちちらら偽いつはり二に郎らうハハんんととちちらら膝ひざをを進まめ
 耳みみととちちらら側わき満まん面めんはは笑わらむむととちちらら聞き果はてて額ひらととちちらら拊ふ原げん来きととちちらら秋あきのの夜よととちちららととちちらら徒つれ然ぜんと
 云いふふととちちらら其その近ちか日ひはは推おし参まゐりりととちちららのの賜たまひひととちちらら入いるるべべききととちちららんん身みをを還かへりり

かく。如此聞えあがていべいと辱く玉手を勞させぬより蔽る衣をぬよ
 優ら。かれバ今より夜と多く日と多く。身は著膚よなるべし。君が惠心を
 仰ぐべし。九の世をかちるとも忘る時ハゆへと傳へぬひてよ。是併おん使乃
 續あり。その些の東西を納めぬよ。預りなかり。おん紙夾と返すも。こま
 まわすてぬひねと辞せり。説示して鼻紙夾を取出つ。處とせぬ匙ハ受
 ころ。準備の服紗は推包。今又こぬ惠と。二色とせぬあがて揉ぬやう
 やと懐へ挾て出る折戸。秋の暑さ夕影。光樹傳小申の時報せり。顔
 ぬび。富小路へ還りつ。軀は阿磔。偽二郎が返辞と述傳へて。件の鼻紙夾を
 處とせり。こぬ惠と。一の狐さへ明々地まんせり。阿磔ハ偽二郎が毎事よ。

心を用ひしるを感して紙夾とせり。納め夕膳果て漱ぎ。彼紙夾ある鏡を
 向んと。懐紙とせり。披く小間。一封の艶簡ありけり。こぬいふとせり。に
 いと浅ましくぬへども。名黄昏のよみれば。今と返とせぬぬ。然ら
 とせり。ちも措き移る。猛は匙と召近づけて。そとけぬ彼人。密ふりけり
 るる。紙夾紙夾の間。物を添て返されと。知りつや。りてまつ。と回れて
 匙ハ顔と目成り。いさく。嚮はせり。外よ。いさく。いさく。又その鼻紙
 夾の内。鏡の外。物なり。と裏に宣せり。ふより。そが。終まらぬ。あつ。と
 いへ。阿磔ハ嘆息。原来を。そと。さうけり。そと。ふ日。来。仿。人の
 好。反。内外。の。いさく。吾。侪。も。あ。ぬ。あ。わ。ら。ぬ。平。余。も。告。る。こ。と。い。ふ。人。

彼人が懐紙を巻籠て。かゝる物を贈りて。さればと。ゆゑの身を。
 回報と。いふ。いふ。いふ。又彼れ。赴き。この艶簡を返して。いふ。
 是の呆きたる。目と圓子。と太息を。今。か。い。彼人の物。い。い。
 懇ろ。り。この底意。あれ。い。い。一筆の回答。も。い。この艶簡を返して。
 渠。飲。び。納。ん。や。怒。り。値。り。い。い。い。や。日。を。奉。り。も。衝。る。も。数。多。い。
 尚。家。公。の。名。を。立。る。い。い。い。外。聞。ら。け。ん。この。い。使。免。さ。い。彼。人。の。
 推。参。り。て。云。云。とい。い。い。い。訪。来。ぬ。日。を。ま。ら。て。返。り。い。い。い。い。
 必。ず。や。と。真。ご。ら。て。推。辞。ハ。阿。羅。ハ。頭。を。傾。り。あ。い。い。い。理。こ。ら。い。い。い。
 彼。人。は。惠。ま。し。東。西。あ。れ。ば。い。使。免。立。か。ら。ん。この。艶。書。且。く。田。め。ち。い。い。

回報と。いふ。いふ。いふ。何。い。い。毛。を。吹。て。疵。を。求。ん。よ。い。い。の。諫。は。徒。ら。ん。努。秘。い。い。
 密。語。つ。復。紙。夾。を。納。め。て。心。は。か。い。い。浅。た。い。又。つ。い。い。い。い。い。い。い。
 貌。の。も。う。才。長。て。け。い。い。い。い。謀。り。い。い。い。い。い。い。い。い。い。
 破。ら。ぬ。竊。見。か。や。と。不。覚。は。い。い。い。い。い。い。い。い。い。い。
 去。ぐ。く。唾。を。り。て。潤。う。徐。々。と。披。き。を。閱。む。い。い。い。い。い。い。
 折。去。似。る。べ。も。わ。い。走。筆。い。と。愛。う。尾。花。が。袖。と。招。き。負。い。い。い。
 たる。文章。よ。い。い。い。い。い。い。い。い。い。い。い。い。い。い。
 か。秋。の。夜。風。の。颯。と。吹。入。ま。す。件。の。艶。簡。の。封。皮。を。閃。々。と。飛。せ。い。い。
 何。と。う。近。き。蚊。遣。火。へ。投。る。か。如。く。吹。入。ま。す。燧。と。燃。立。程。由。り。灰。も



一陳の魔
風
艶書を燔

せむじのりたり。阿磔あはせの形勢かたち。さういふせんと驚忙おどろきあせて追おんとする。小竟こけいは
 及および悔くれり。然しかして。身みを恨うらむ術まがへ。封皮ふうひを失うはて。返かへさとも
 受うけられ。早はやて。やまんか。せん。とひ。つ。困こ下げ果はつ。も。早はやて。又また。やま。め。め。め。め。
 恋こする。癖くせ者もの。是こ返かへさ。ど。何なにと。さ。へ。留とど置め入り。影かげ護ご。と。ひ。つ。つ。つ。つ。件けんの
 艶えん簡かんと。蚊こ遣し火ひ鉢はち。投なげ。入り。その。緯いとの。為ため。体てい。潔けつ。ま。似に。似に。心こころ。も。な。く。迷まよひ。初はじめ。
 ころ。ま。から。さ。ら。に。わ。ね。又また。ま。か。は。い。思おもひ。と。俣た。と。ま。す。よ。日ひ。を。送おく。り。ぬ。

第六套

除雷の金樹

山鷄の水鏡

程ほど。草くさ。樂らく。傳でん。二に。郎らう。八はち。曩な。よ。匙し。を。還かへ。せ。よ。り。既すで。に。四よ。五ご。日にち。を。歴へ。れ。れ。れ。れ。れ。れ。彼かの
 下女げにょ。再また。び。来き。る。と。き。原はら。来きた。り。艶えん。簡かん。恙や。み。く。彼かの。君きみ。の。納な。め。つ。人ひと。今いま。の。死し。比ひ。の。

べ。こ。へ。の。朝あ。り。沐み。浴よく。心こころ。を。用もち。ひ。て。衣い。裳せう。も。暗くら。と。装ま。飾し。ア。の。タ。レ
 よ。り。手て。内うち。を。出で。て。途みち。を。酒さけ。肴さかな。と。買か。ひ。手て。つ。つ。偏へん。提てい。を。携た。り。富とみ。小こ。路ろ。よ
 赴おもむ。き。人ひと。も。問と。ひ。彼かの。此この。と。の。宿しゆく。所ところ。を。索もと。る。よ。衡へい。門もん。は。標ひょう。牌はい。と。打う。ち。名な。草くさ。劇げき。齋さい。と
 写うつ。し。た。と。ば。さ。り。け。り。と。こ。ろ。は。点てん。頭とう。外がい。面めん。より。窺うかが。ひ。程ほど。は。匙し。ハ。門もん。と。鎖さ。ん。と。折を。り
 よ。り。外と。は。出で。つ。ま。暮くれ。果は。ぬ。星せい。明めい。は。送おく。さ。面めん。と。あ。へ。る。偽いつはり。二に。郎らう。荒あ。然ら。と。打う。笑わら。て。
 こ。へ。阿あ。比ひ。と。の。恙や。み。な。や。主しゆ。人にん。の。い。ま。を。還かへ。り。た。ら。彼かの。君きみ。ひ。と。り。や。い。ぬ。前まへ。日ひ。の
 おん。惠めぐみ。心こころ。の。謝あやま。り。と。ま。う。と。ん。為な。り。偽いつはり。二に。郎らう。か。ま。う。と。傳でん。へ。て。た。へ。と。密ひそ。語ご。バ。匙し。と
 小こ。腰こし。を。折を。め。つ。こ。へ。よ。く。こ。と。と。亦また。も。果は。ど。忙いそ。しく。内うち。は。入い。り。て。ま。ま。と。告つ。ぐ。ふ。あ。ん。
 阿あ。磔はせ。の。胸むね。ま。づ。ら。ら。騒さわ。ぎ。と。速すみ。は。避さ。げ。ん。所ところ。を。知し。り。ど。か。い。ひ。て。返かへ。り。入い。り。候こう。と。答こた。へ

ようらん款と多ひの面答か経て匙と引つけ置程は偽二郎を千くその
 氣と察して呼門ゆせと進み入る。既よ次の間を未よけ且バ阿磔ハ遂は
 避る由あり。馳て出て對面と當下偽二郎ハ寒暖を述安否を訊扱ひ
 せり。曩より不憶るふより。玉手と勞せのともは。去より種々を賜
 下。ちん心標の忝さ。寐ても寤ても忘らまじど切てその謝を面よりまう
 さんとしてかく推まつまう下ぬ就て。さうさうの苞首之日未美味珍膳は
 富せぬ口を稱ひくくゆいといひつ。偏提をさうよとれば
 阿磔ハ恥さる。ちのちを。さうさうひひもる。さうは衣を損ひ。罪を免れ
 たるよし。此の東西を進せよ。その回報をさうさうハ好意ハいさる。

款く付し下る。受まうさうハあべと辞ひつ強つ謙退辞讓は言果づくもあ
 べバ阿磔ハ困どて傍をえかへり。匙よ。かくまを推辞ても。聴たぬとさうせん同れて
 間へ小膝を進め。推辞のハ理るれども。酒返ハさありのといへり。ともかくも
 計ひてん妻は預けのハ袖と和鮮て偏提を引よく。さうハ危溜より退つ。
 酒を湯め者と扱きて。馳て偽二郎ハ勧めけり。そのさう偽二郎と愛さるふ
 あはねども。前日多ひかけもあ。その賄賂を受れば報いとせんともい
 あり。阿磔も今ハ己と承ゆと孟と奉て偽二郎と款待程は下戸のぬこそ
 身の仇も巡る不皿のかどく。よ客も主も微酔する。偽二郎ハぬて落語は
 笑いと催し。或ハ浮世の物語恋せり人の噂さへ。さう身の懺悔はさうなりつ。

奥より来りて又のや。率介あるものも。六七年よりや。わりのぬ某流浪
 ある時鎌倉ある友と索りて。そと彼地へ赴き。その人へ去歳のその
 月身やうやぬと。進退其れは谷りて。いふとせん。と。その日の
 既暮る。獨行と宿賃。己と。鐵の觀音堂。曉るを待
 一。時の又三。わりのけん。と。男と女と。忙しく走り来つ。草折布て
 坐と台て。俱死ん。折り。そ。追来つ。人影。棒と閃と。撃んと。と。
 男の女と。後方は推遣り。又。振り逆戦。大刀風。堪と。わりのけん。
 幾と崩れ。逃走せ。何れ。追蒐り。當下女ハ驚き。忙て觀音
 堂。隠れんと。欵扉と開んと。打て斜る。故。引。速。

沿開。某の初より。月光。闕窺つ。いと痛く。又。扶。を。や。く
 隠。んと。と。裡面より。扉と推開つ。搔抱て。引入る。女。の。意。を
 引。苦と叫び。逃。んと。と。又。抱。か。か。か。と。手。が
 障り。足も障り。て。理。も。結。び。捨。る。假寐の夢の解。て。果敢。や。死
 雪の下。顔も認め。ど。名告。も。せ。ど。別。と。遺。る。叙。見。月。は。翳。り。て
 熟視。と。銀。ふ。と。絢。彫。あり。渦水の紋。と。彫。り。遺。憾。は。魂。焦。と。と。く。
 迹。と。慕。り。て。邁。程。は。蕉。火。夥。ゆ。照。り。て。再。び。追。隊。い。て。来。り。喧。嘩。の
 側杖。打。と。と。横。さ。る。道。の。迹。も。由。苗。と。と。や。曉。々。の。天。牙。て。降。る。霜。月。の
 草枕。旅。の。あ。ま。は。風。聞。と。聞。定。る。と。も。ゆ。る。と。臥。然。て。浪花。は。赴。け。不。さ。彼

女をのふりけんをと痛いくことを阿あ磔は額が手を加くつくとゆてさ嘆なげ
 しく。小男こををうる。浮氣うをあるりのあわい。さうを人をも亦も俱も死にて走はり
 郎をと棄すて誰をも靡をくべき。名を天原あまのの雜ご混こ寐ねでも神をの結むせを入いへとおのの
 ぶ死にのあまりは情をみ。只是ただ浮氣うをはたむとちといひて偽二に郎に頭をと拊を然に一はは
 宣のへ浮氣をもいつべけしど某が本心ほんしんへ原を彼女かのを堂内どうないへ隠をさんとかりす
 起おきまる。かれば是浮氣うをは似にて。慈悲じい真ま實じつはいのころを。情郎じやうらうのありと知しりつ。
 技をんとさひしのと況を某がその密ひそまるるを。逃に足を遅お鈍お追お逼おらんと。何をぶ
 女をと苦くむら。さうおののさんだやといひさげば。阿あ磔は右みぎ理りと点頭てんとうのを側聞かたきこる
 匙をひさり。堪たむや吐をと笑をひけりがく。奥おくつ酒もる。酣あふし今いま暮くれぬとかりひ

一よ夜よへ二に更まるら。南みなの窓まどは月影つきかげも野干玉のくわんぎよくの鳥夜やまとるまでいつの
 程ほどの秋あき天てん結むす陰かげて。夜よ雨あめ頻しばしば降ふる。雷かみさへ大おほく鳴な出でる。阿あ磔はと忽たち地
 奥おくにあり。やち匙を雷かみの鳴なをせめめるら。とく隙を垂つてとととと急いそぐ
 程ほどは。母はは鳴な渡わたる。雷かみ電でん暴はげ雨あめ匙をへ怕おそる。氣色けしきも。唯ただと応こたて身みを起おこし。
 次つぎの間まは臥ふ簟と布ぬいをて。懈ゆるり揚あげ立た騷さわげは偽いつはり二に郎に似にげるも。怕おそまそ
 耳みみは手てを放はなさる。某の性しやうとて雷かみ鳴なを甚し嫌きらむ。笑わらむも堪たむが。許ゆるさる
 ぬとむらるら。小こ鷲じゆま立て次つぎの間まは。ちと垂た果はぬ。懈ゆるりを塞ふて。閃ひらくと入いるら
 俯うつろろる。匙をへここへ目めもかけど。後方のちへを信まつとんかりて。噫あ鈍おすや。
 抜ぬくはけり。仰あぐもまど開ひく。矮樓わいろうの兩戸りやうこも闔くわんざる。いとくとひさるら。

厨のかへ走去つ。あ月鳴渡る大声發動阿磔ハ顔の色変るまで。
 素より怖る雷鳴よ今もや憚を坐して。偽二郎は先とせらるまで。
 一所又入るんはさかた多う。齒戦まろ普門品の除雷の偈を唱る程よ。
 晃き走る電光は障子杉戸由響動るたぐり。裏々と鳴るさめけバ。
 遂は忍ぶは忍ぶとて驚忙て憚の中へ逃籠るごとくさびむ。跟々とて
 偽二郎が何とくへ撲地と臥しけり。嗚呼是怎生ある天変ぞ巫山の雲
 楚臺の雨造化も亦意ありて。奸夫淫婦を資る快言但れを天といひや
 小人ハ媚むべく。君子ハ懼てじと捨べ。さる程は匙ハ精悍しく立達りて。
 雨戸繰被るどとる。雷ハ後の一声のまて。雨ハる降けり。よりとく

盃盤とぞ納めて偏提も洗い清めり。物大くは成果も客もあつても一房と
 出で雷の鳴るべり。によう。厨は存一程偽二郎ハ還るむひ一欵
 刀自ハ熟睡まひ一欵と心りとあひむいへど。潜すふ立りて。憚の中を
 さ一覗けば。偽二郎ハそが倭は阿磔と俱臥てをり。根がへは光景は胸騒ぎ
 膽潰まろ。顔は紅葉のから散るの。驚きんはさかた多う。足もや退死つ。
 その起出ると候はる。要時こそありけり。蚊は刺るを覚ぬまそいさの
 いだる死へ。とて少女の癖るん。更闌る随睡は堪む。いさの程ふり
 假寐して天の明るまで。さうけり。早くと憚の中。阿磔ハやをさ
 身と起して。潜然とて目皮を潤し。浅まやんまが。初ハ雷鳴小

怖ぢどひて。どいど一蚊屋中よりの雷鎮アそハ又さまの情は羈されて。
 心よろくぞありふたる。酒こそ色の咎ありけし。あれども。妾ハ既ふぬあり。
 のこ主人還つて人告げ身の罪免さかざるべ。かれバおん身ハこ仇之。
 いと恨し人ふこそと悲言かやうく怨どれば偽二郎も亦遠く起さずそ
 衿搔合し。まういらくハ理之恋ハ思念の外といへり。いぬ日おん身を着恋しう。
 千萬无量の心と苦しめ。やうやく本意を遂されハ命も絶て惜かど。憎しと
 ぞ。速し手づらう。吾侪を刺殺して身のいひられと志のひね。殺さばとも
 君が手よ。からば願ふ所といひつ。まをう外よ出て。こが腕刀を引提来と。
 阿磔がわらうよ。かんと。かんと。のせと目と拭ひ浅す。れらるま志のいそ咎と

おん身は負せんとて。今こそ物とどらんや。いぬ日おん身が鼻紙夾ハ刺入しそ
 贈りひ。艶簡を披くぞ。佐は返さんとどひつ。云々ののみよ。焼失ひて返
 さま由る。遂は今宵よ及ぶ。是假初の縁あり。いせおわらざる物こそ
 あれ。是を認つてとる。飲といひつ。膚は著しう。護身囊とら披つ。
 紙捻せ物とぞ出して示さよ。えん偽二郎ハ不審とどひる。拾籠る。紙を
 披てこれとる。紫金をりて山鶏の雄一隻を彫成る。片靴のやうなハ又行燈を
 引よ。と。さんか。えつ。ら。驚。こ。へ。往。年。鎌。倉。み。て。こ。が。失。ひ。つ。る。物。よ。似。う。曩
 又酔よ来しつ。どいども告しう。彼鐵觀音堂よ。頻よ女と挑する。その
 折や失けん。次の目よ。ま。バ。こ。腕。刀。の。面。靴。あ。り。け。り。靴。糸。片。手。卷。あ。り。ん。

青石文卷三

十九

手搦て断きる如ごとくも落おちんとまぐさらうらうらうらうらのの後のちはももかて
浪速なみのはももかては靴くつ糸いとをま更かへて小こ片かた靴くつあらはらうら観くわん音おん堂どうをう捨すては彼かの
渦水うずみのの紋もんをう彫うるる銀ぎんのの釵かんざし見けんのの頭かぶ尾おをう断きては程ほどようくくをう断きては靴くつは代りた。
その彼かの女をのの像よう見けんともいいはいとまうらうらうらうら慕あこがれる失あはれたのことをういいまうるるま
遺おとしせりしの靴くつともいいはい年とし来きた秘ひおもたへるる原はら来きたをういいはいのの夜よはも情せう郎らうとも死し後ご後ごれて。
あらまのの懐なつかしいならうらうらうら女子こ子ごであらうるる然しからば不ふ思し議ぎのの再さい會かい之の現げん假かり初はつのの縁ゆかり一いふ
わらんの奇きともいいはいとまうらうらうら又また腋わき刀やいばをうとりあらげつ。そのの靴くつともいいはい阿あ碌ろくのの顔かほは驚嘆きんたん
しては羞はてし目め物ものいいはいまうるるやく頭かぶをう握にぎり今今いまハハ隠かくしの由よしをういいはい。妾めかけハハ鎌かま倉くらのの米こめ町まちをう。
佐さ栗り灸し平へいともいいはいのの女を見けんぬる。そのの時ときハハ名なをう水みづ石いしともいいはい。さとはは辻つじ町まちをう。一時いちじ豪ごう家け



嶋しま影かげ屋や湯ゆ治ぢともいいはいのの親おや夜よ平へいがが債せのの代しろはは妾めかけともいいはいうらうらうら娶よめりうらうらう。妾めかけをう。
豫よては契ちぎりうらう。盧ろ頭かぶ吉きちともいいはい郎らうがが僕こしもはは死しんと走はりた。そのの夜よののあらまうらう。
あらまのの懐なつかしいならうらうらうらいいはいののあらまうらう。かかては彼かの盧ろ頭かぶ吉きちハハ追お隊たいのの雜ざ人にんをう下くだには撃うち倒れた。
嶋しま影かげ屋やへへ引ひかてきれ妾めかけハハ親おやのの技わざ助すけをうとりては目めくく親おや家けハハ隠かくるる程ほどハハ遂ついにに文ぶん注ちゆう
所ところののあらまうらうともいいはいうらうらうら妾めかけをう離はなれる。親おや夜よ平へいハハ返かえりまいひ。又またハハ親おやのの
借かりうらう。金かね百ひゃく両りやうをう湯ゆ治ぢにに返かえせり。最さいにに命いのちをういいはい。盧ろ頭かぶ吉きちハハ舊ふる悪あくわらうらともいいはい。
あらまのの懐なつかしいならうらうらうらいいはいののあらまうらう。そのの時とき初はつにに文ぶん注ちゆう所ところをう。盧ろ頭かぶ吉きちハハ撲うつた瘡かさをういいはいりり。小こ。
鼻はなハハ缺けつ額がくへへ腫はれる。ようふふあらまうらうらう面おもて影かげのの色いろハハ情せうもも醒さ果ぐわては再さい見けんとも見けんかへる
べくものの欠け。尚さらにに郎らうハハ許ゆるされては夫つま婦むハハあらまうらうらう仰おほむべいいとも悔くかへまうらう。かかう

ろるるの幸あり。中の幸あり。と云ふも。又當然難義あり。彼百金を嶋影
 屋へ返すと云ふ。金調へど。遂は口を大磯の花街に沈め。ややく小
 親の債を贖ひつ。妓院の勤苦くも。身衰へ死の程多し。年もつら
 たり。比二親もよ。才ありぬ。かくて湯治も次の年。心乱して自殺。つ家ハ
 迹多断絶。灰は傳へ聞の。籠の鳥ある。妓院よ。本末巨細一
 ある。より。多し。終は怨を復せ。と云ひ。も罪悔か。べ。是より先よ。あ
 夜より。鐵觀音堂のほ。り。妻の親は助け。脱して親家へ還り。
 時。社と脱んと。程は。夜領の間は。物あり。音して。落る。を。取。ま。ご。の。山。鷄。の
 鞠。その。死。竊。ま。り。必。死。を。究。め。これ。を。挑。と。戯。彼。男。子。こ。と。い。と

憎むべし。の。も。備。彼。人。は。引。入。ま。り。て。觀。音。堂。に。籠。ら。せ。吾。侪。も。追。隊。捕。へ
 ら。れ。て。恥。の。う。へ。辱。事。あ。り。情。死。後。追。隊。を。脱。して。親。の。家。へ。還。り。し。
 全。く。彼。人。の。資。を。と。り。然。る。と。死。の。再。生。の。恩。を。と。せ。べ。く。大。摩。訶。草。の。仇。枕
 也。過。世。あり。て。の。な。ら。ぬ。且。この。鞠。め。り。の。の。懐。あ。る。べき。筈。み。し。
 彼。人。吾。侪。を。挑。し。時。刀。の。鞘。を。突。入。して。お。ど。遺。せ。物。多。く。べ。し。又。只。お。ま。を
 の。よ。あ。ら。ぬ。時。お。送。せ。び。飲。見。一。條。み。し。何。よ。ま。れ。の。鞠。を。秘。置。は。る。の
 人。と。知。る。と。云。ふ。や。ど。ん。と。云。ひ。と。う。紙。を。捨。て。護。身。囊。を。納。め。し。ぎ。
 かくて。口。を。を。售。り。し。妓。院。の。勤。年。を。歴。て。年。限。多。し。一。年。あり。し。去。歲。の。春
 浪花。の。商。旅。の。主。管。に。受。出。し。て。彼。地。へ。赴。き。中。宿。に。隱。置。して。處。る。と。後。よ

西月許（ひとさき）の人の私慾（ひとごころ）發覺（あきつ）て親方許（おやうち）逐出（おしだ）され妾（めかけ）を預け一宿（ひととせ）は僕（おこ）居（ゐ）る
 けり目（め）もあらず猛（たけ）時疫（とき）を牙（は）あかりつ憑（よ）心（こころ）樹下（きよのした）は雨漏（あめ）りてせんべるん
 しか身（み）の乳守（ちちのまもり）され神崎（かみさき）され浮身（うきみ）の宿（しゆく）は身（み）とよせて再び拵（おそろ）いと人勸（ひとをすす）め
 へ二度（ふたたび）の苦畏（くるしみ）のいふ不好（いふ）京（みやこ）は二個（ふたご）の親類（おやしん）あり妾（めかけ）が母（はは）の従（したが）父（ちち）姉妹（あねいもうと）あり
 名（な）を異杜（いり）と呼（よ）ぶ今（いま）も松木挽坊（まきまひぼう）のほろ小（こ）をり渠（みち）も初（はつ）に化粧坂（けしょうざか）を腰掛（こしかけ）
 酒（さけ）を賣（う）りしより續（つ）く趣舍（しゆせ）の多（おほ）まは夫（おとこ）は僕（おこ）して都（みやこ）よりさかも世（よ）を
 渡（わた）る程（ほど）は近属（ちか）夫（おとこ）の世（よ）を逆（さか）ぬ寡居（あはれ）は債東（ちやうとう）維（ゐ）して細（こ）き煙（けむり）を立（た）たり牙（は）の為（ため）に
 ろ親族（おやしん）ありぬと妾（めかけ）がうへと侍（さむらい）つゝいと憑（よ）心（こころ）く消息（しよせき）して懇（こころ）招（ま）くふより去歲（こぞ）の
 秋（あき）より都（みやこ）よりて異杜（いり）許（もと）宿（しゆく）とつ初冬（はつふゆ）の比媒（ひま）好（この）せんでその主人（おし）の側室（そばむろ）は

ろつゝの程（ほど）もあく家の事（いへ）のみ任用（にんよう）せられふの隨意（しよゐ）あらうとて正妻（あまのむすめ）小
 一（ひと）も異なる（こと）然（しか）とと好（この）る夫（おとこ）ありぬ情（なさけ）入（い）深（ふか）思（おも）ふ亦（また）重（おも）きうへの小夜衣（せやえ）つまを
 累（かさね）る罪科（つみ）ハ過世（あまのこ）脱（だ）はぬ業報（ごうぼう）歎（なげ）ひ絶（た）んとありぬも放（はな）ともるは身（み）の因果（いんぐわ）
 心（こころ）太（おほ）くも苗守（なえまもり）の宿（しゆく）あふ夜の數（かず）ハ限（かぎ）りあり後の別（わか）れを今（いま）さる想（おも）ひ像（や）れハ形（かたち）
 ろ悲（かな）しとつと密音（ひそ）は郎（らう）の膝（ひざ）はぬり涙（なみだ）は癡情（ちやうじやう）と頭（あたま）せり偽（いつはり）二郎（にらう）へつと
 聞（き）くは樂（たの）しく望（のぞ）み足（た）りて罪（つみ）も報（むか）ひのうでるありん袖（そで）りて膝（ひざ）あり涙（なみだ）を拭（ぬ）ひ
 己（おの）れもあふハ鐵（てつ）の觀音堂（くわんおんどう）あて邂逅（あひま）せし女子（むすめ）こととあひひみ秘（ひ）に知（し）ハかれ
 蓮華院（れんげゐん）の觀音堂（くわんおんどう）あて眷恋（けんれん）より寐（い）ても寤（さ）ても忘（わ）る時（とき）あり枕（まくら）を推（お）す
 胸（むね）を苦（くる）め如意（に）満願（まん）の今（いま）ぞ知（し）る東國（あづま）で結（むす）び前縁（まへえん）ありのらんや又（また）は

山鶏の片靴とん牙が渦水の釣見と送代は身は著て年へ経ても失へど。
 今再會の識とあり一人力ある天縁あるんん主人はあつても。
 内妾のふりあればそが還るの後術よくして身の暇を請ひて次ぐ退
 去へん牙の則り妻あり歎くところへと慰めり又彼靴をどうあびつる
 少くもこの山鶏こそ後の縁と結ぶの神ある奇ごとと稱賛して包紙
 さらう披きさらう視る幽字を数个字あり附隔は行燈よ。
 さつひて又よく視まば。山鶏のちうりけささみうね溺るおま水か
 してと一首の歌ある書しける。偽二郎まぐくち吟してこの歌ん牙が詠
 たる歌と問へ阿磔へ詠げその紙をさかかへる妾へ素より歌をゆ

よまば初この靴を包紙の白紙あり然ると自然とこの歌の見まする歎不思
 議のうは是尙とこの歌へ筆りて書するのあは虫の糞るごふの著て
 文字よまするが如く歌のさほり甚麼あるのぞいも怪くけりま。とらまて
 偽二郎驚嘆し。現在の文字へ虫の糞ごりも歌をゆまるにも。嘗物あぐ
 えるこあり山鶏の鏡といふ。魏の武帝の故事に南山といふ処より山鶏を献
 せし時その鳴て且舞ふを見んと欲せんもさあつた時又公子蒼といふの
 鏡をその籠に掛て形を鑑せし山鶏の影を見て悲し舞て止る遂に
 死せといひ傳へしと和歌に山さうのさうの尾は鏡うけさるべしとまよ
 みぞりけり人磨へよまなるま。この外は山鶏の水鏡といふのあ歌はれい

あつて歌のころのまねかまね歌の進雄尊の八雲ら出雲八重垣を権輿と
 して奇稲媛を娶りぬ妹使のそあもつてわのさればこの包紙は初めは歌
 おのづから願まじくへおん身とされと夫婦はあふまじく祥よとていと愛とと祝げん
 阿磔も亦款びく以後憑くくあひくも嗚呼奸多かる邪ある哉於戲愚
 ろるふ迷へるうね偽二郎ハ鎌倉まで観音堂を穢くする盗行と悔む怕る
 再び京ある観音堂まで阿磔と眷恋て靈籤の倣歳と悟る種々の
 奸計とめぐるて人の妻妾と竊盗又靈籤の歌とて怕るて神の
 助とて曲学暗記みぐる揣ぐ奸中く愚の甚死の天怒冥罰結局に至て
 知るべし又阿磔が淫奔ある譬へ路傍の花の如く只人々を折ると栄と成又

道中の駄馬の如く人々毎日小乗とて飽と補綴者云大約傳奇小説は奸夫
 淫婦の情態を寫す是誨淫まらうまらうも詩は鄭衛の淫風あり聖人
 ことと削ぐるハ蓋戒と後世は垂るるべし尙この意をひるものこの編を
 見へ嘲りて宜淫道尊甚とこの意をひるものこの條を嘲りて癡漢
 固く耳と塞て鈴と盗む如くといふ戯謔も思ふ出づ豈補綴乃本意
 るんや今原稿の大意は縁とてと筆削せしめられ聊勸懲の辞を
 添ふ只彼遊里はその子は撞見て親を殺すと戒る白物あはれとあん
 末編局と結ぶまで讀得て作者の用心を知るべし問話休題かくその話
 朝阿磔ハ匙と召近づけて主人の還るるまで偽二郎ぬと潜す小苗んと

ちり。そる内外の播とありて。よろづ小を附て。必要のものは。
 ちり。そる内外の播とありて。よろづ小を附て。必要のものは。
 ちり。そる内外の播とありて。よろづ小を附て。必要のものは。
 ちり。そる内外の播とありて。よろづ小を附て。必要のものは。
 ちり。そる内外の播とありて。よろづ小を附て。必要のものは。
 ちり。そる内外の播とありて。よろづ小を附て。必要のものは。
 ちり。そる内外の播とありて。よろづ小を附て。必要のものは。
 ちり。そる内外の播とありて。よろづ小を附て。必要のものは。
 ちり。そる内外の播とありて。よろづ小を附て。必要のものは。
 ちり。そる内外の播とありて。よろづ小を附て。必要のものは。

安穩る人。皆春水の碑とて。浮沈を共にまつる。是併浴當が怨
 靈。只その金は賞縁で。崇まりのなるべし。あつく貪婪淫慾を。
 みるら招く殃危あり。妖の徳小勝とて。とを浴當が冤魂の所為と
 のと人の違へ。仁人義士忠臣孝子。順孫貞女賢妻。かゝる崇あるべし
 や。汝は出て汝は返る。冥罰とんを。かて又偽三郎の朝阿磔は
 いふや。其蓮華院は寄宿とある。経巻繕寫の為あり。今辞せりて
 ぐま在る。寺僧亦は怪とん。下は寺は立かへ。よくらく今宵又
 潜く。よまると死のい。後安か。といへ阿磔もその意は伴て。
 竊は背門より出遣けり。かくて偽三郎の蓮華院は還つ。住持は

偽り告ていふ事。某昨夜外に出。浪花の友は逢へり。その人則告て
 いふ。某が乾親へ共は浪花人あり。いぬ日より彼夫婦齊病臥て
 命危し。要時の暇をとりて浪花へ来よ。といふ。是れ乾親夫婦の
 ろんが。且く身の暇をとり。彼地より来た。年来の恩義は酬ふを以て
 寔はこゝろ幸あるん。その病がこゝろかへり来た。と云葉巧は
 欺へ住持へ聞てうち頷き。寺の筆畊の尤大部の巻軸を以て性急は
 せよとよめ。さるもとの病人も。浪花のころこそ火急の義あるや。よく
 彼地へ赴きて看病果て又来ぬと快く許し。此の餞別を取せしむ。と
 偽二郎の欺び受て退ると衆僧は告。今宵渡船は乗んとて。口部屋の

物なと大くさるり飲めて申の比及ま寺と辞り去り。且く途日と消し。と
 又彼宿所へ赴く程。阿磔の匙共侶の手つら酒食を安排して。今更くと
 俟てをり。背門より竊は音つら。聞果もせど迎入し。馳て便室に伴ひ
 けり。是よりして偽二郎の阿磔と枕席を俱くして。西三月潜びてをり。
 あるれども劇齋の病架の外は客を招く。親き友人あり。一は留守の家
 主人訪む。故は奸夫淫婦の匙を雁番小して忌憚る。目とる夜とる
 情慾を恣よせし。無慈悲也。

刀筆青砥石文書水鏡語卷之三終

